

J.A.ホブスンの経済思想

—— 20世紀前半における批判的経済学者

相沢裕紀

法政大学大学院経済学研究科博士後期過程経済学専攻

はじめに

レーニンとケインズがともに「賛辞」を送っている J.A. ホブスンという経済思想家は実に不思議な存在である。実のところ、ホブスンの経済思想は、レーニンやケインズ以外の幅広い人々にも影響をあたえ、また議論の対象となったが、彼は一定の学派というものを形成することがなかった。つまりホブソンは彼の理論の直接的な後継者を残さなかったのである。清水嘉治は 1958 年、ホブソン生誕百周年を記念する年に「ホブスンの生国イギリスでは、中近東の植民地支配が暗礁にのりあげた時期に直面しても、ホブスンに関する記念のパンフレット一冊をも、世におくることができなかった」と述べている（『ホブソン「帝国主義」研究の現代的課題——ホブソン生誕百年にあたって——』P1）。ホブスンの再評価がイギリスにおいて進むのは、1960 年代以降のことであった（高橋哲雄「あとがき」J.A.ホブスン著『異端の経済学者の告白』（以下『告白』と略記）P203）。しかし、経済思想の歴史において、彼の残した影響というものは決して小さいものではなかった。私はこの報告において、ホブスンと彼の同時代の経済学者との関連を示すとともに、この「孤立」した経済思想家の主張の独自性について検討を行う。

1. イギリスの戦間期における代表的な「制度派経済学者」

第一次世界大戦後から、第二次世界大戦直前までの時代を「戦間期」という一つの時代として考えた場合、この時代の経済学の特徴として、制度学派と呼ばれる経済学派の存在がその特徴として挙げられるであろう。この制度学派について、都留重人は「シュンペーターやサムエルソンは制度学派をアメリカにおける歴史学派としてしか評価していない」と述べている。そして、これを「不十分な規定である」と評している（『現代経済学の群像』P204）。都留は制度学派が「十九世紀末にあらわとなった資本主義の矛盾を意識的にとりあげて理論化することを心掛け、古典学派の快楽主義的前提であるホモ・エコノミクス（経済人）という概念を捨て、社会的承認を受けた慣習的思考や行動様式、あるいはそれ自らの活動準則をもつ家族・株式会社・労働組合・国家などの諸社会制度の分析に重点をおいた」という点を指摘し（『現代経済学の群像』P204）、そして、制度学派が、「このような制度の累積的發展としての経済現象を、社会福祉の増進という見地から考察した」という点において歴史学派と異なっている、と主張している（『現代経済学の群像』P205）。このような点からみると、J.A.ホブスンも制度学派に含まれると考えることができるだろう。

経済学のありかたをめぐることは、今日においてもなお論争が存在しているが、言うまでもなく、第一次世界大戦後から、第二次世界大戦直前という時代は二十一世紀の初頭にある現代とはかなり環境に隔たりがあり、当時の経済学、あるいは経済問題に対する論争もまた、今日のそれとは性質を異にしているということは否定できないことである。経済学、あるいは経済に対する問題という

ことを考えた場合、二十一世紀には二十一世紀の問題があるように、ホブスンが生きた十九世紀後半から二十世紀前半にも、その時代特有の問題があった。このような時代を生きた経済思想家としてのホブソンの主張は、今日においてもなお興味深い点を持っているのである。

2. 国際紛争という問題

経済学史上、制度学派はアメリカのヴェブレンによって創設された、と考えられている。しかし、ヴェブレンと同時代に活躍した、イギリスのホブスンもまた、制度学派的な観点から経済問題、ならびに経済学に対する研究を行ったという点で重要な存在であると言える。彼らの生きた時代の特徴を挙げるとすれば、それは世界の国々間の緊張と対立がかつて無いほど大規模な形で高まっていた、という点を挙げることができるだろう。ホブスはヴェブレンの学説を『ヴェブレン』において検討を加えつつ紹介しているが、この中でホブスはヴェブレンの著書である『平和の性質』について言及している。ホブスンはこの著作について「かれの思考は、意図的に戦争をつくりだす国としての『ドイツ帝国』に集中していた」と論じている。そして、「この帝国主義的な激しい敵意の分析は政治的衝動を経済的状况に密接に関係させている」と評している。

ホブスンの代表的な著作として『帝国主義論』が挙げられることが多いが、この著作においても、イギリスが参戦した南ア戦争（「ボーア」あるいは「ブル」戦争）に対する考察が、一つのテーマとなっている。このように、ヴェブレンもホブスンも、どちらも国際紛争という現実的な問題に対する議論を行っているが、このような点においても、両者の問題意識において共通の特徴があるという点が指摘できる。

3. ケインズとレーニン

J.M.ケインズは『一般理論』の中でホブスン（ホブソン）が「ほぼ五十年にわたって、たゆまぬ、しかし無益に近いまでの情熱と勇気をもって正統派の戦列に向かって攻撃を加えた」と述べ、そして、「この書物（[注]『産業の生理学』）はそうした彼の多くの著作の中で最初の、そして最も重要なものであった」（塩野谷祐一 訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』（1935）P367）とホブスンの研究に対する賛辞を送っている。ホブスンは「ケインズ以前のケインズ」（[注]「あとがき」『告白』（以下『告白』P201））と評されることもあるように、その「過少消費説」においてケインズ理論の先駆的存在であるとみなされている。

また、ケインズがホブスンについて『一般理論』の中で言及した時代からさかのぼること十数年前に、レーニンはホブスンの『帝国主義論』について「帝国主義の基本的な経済的・政治的特質を、はなはだ見事に、かつ詳細に詳述している」と評価している（『資本主義の最高の段階としての帝国主義』（1920）「世界の名著 レーニン」P288）。ケインズならびに、レーニンは二十世紀の経済学の歴史において、独特な位置を占めているが、共にホブスンに対して高い評価を行っている点で両者には共通点があると言えるかもしれない。しかし、冷戦の終結後、レーニンの像は引き倒され、また、近年、ケインズ的な公共投資政策は大きな見直しを迫られるようになった。現代は、まさに、ホブスンの意見は再び「異端」的なものとなりつつあると言えるのかもしれない。

ところで、M.ブローグは『経済理論の歴史』の第十一章「限界生産力的分配理論」において、マールシャルによるホブスンへの反論について言及している。ホブスは『産業体制』の中で、限界生

産力説に対する批判を行っている。ホブスンの主張をブローグは次のように要約している。つまり、労働の量が増加すれば、資本の質にも変化が生じる。したがって産出の変化を労働のみに帰属させることができないのである。マーシャルは『経済学原理』の中でこれに対する反論を行っているが、ブローグは「一要因の限界純生産物の概念を導入することによって、事実上ホブスンに降伏している」(『経済理論の歴史(Ⅲ)』P706)と述べている。このような、マイクロ理論の基本的な部分に対して、ホブスンが二十世紀のはじめに、このような批判を行っていた、という点は経済学の歴史を考える場合、興味深いだけでなく、マイクロ理論に対する批判的観点を提出している点において、ホブスンの限界主義的経済学に対する批判的観点は現代においても、なお検討に値する点を持っていると言える。

ホブスは自らを「異端」の経済学者と呼んできたがそれは、主に、彼が「過少消費説」を主張したところ由来している。ホブスンの基本的な論点は「市場とは本来が不公平な分配様式なのである」(『告白』P152)という彼の言葉に要約することができるだろう。ホブスは売り手と買い手の利害が市場において一致するとは考えなかったのである。ホブスは新古典派経済学者であるクラークに対して批判を行っているが、クラークはその著作の中で「もし妨害するものがなかったら」経済は均衡すると主張しているのに対し、それは「もし現実にあるものとは異なった機構があるのなら」と言っているのに等しい、とホブスは批判する(*The Industrial System*, P120)。限界主義的な経済理論から導き出される結論は、各自が自己の利益を追求することによって社会全体の富が増大する、という市場メカニズムに対する楽観的な考え方であった。つまり、主流派経済学理論とはそのような自由放任経済に対する理論的な裏付けを行うことであった。しかし、ホブスは市場システムに対する楽観的な見方に対する批判を行っている。ホブスは『帝国主義』によって広く知られているが、利益を追求する企業組織というものが時として国民を巻き込むような戦争をも引き起こすという問題を指摘することによって、彼は市場経済に対する楽観的な見解に対して大きな疑問を投げかけたのである。彼のこのような主張の背景には彼の生きた時代に発生した、ボーア戦争や米西戦争といった列強諸国における帝国主義にともなう事件が影を落としていると言えるだろう。

4. 原子論的な人間観に対する批判

限界主義的な経済思想の特徴として、利己的な個人が自分の利益を最大化するように行動するという見方がある。ホブスンの新古典派的な経済思想に対する批判的観点において重要な点として、このような、「原子論」的な人間観に対する批判も挙げることができる。この経済思想における「原子論的人間観」については、19世紀後半、経済学方法論上の問題として論争となっていた問題である。例えば、メンガーは『経済学の方法に関する研究』において、「独逸の最近の経済学文献において甚だ軽々しく、理論的経済学の本来の課題に携わっているものに対して全く誰彼なしに加えられるところの原子論の批判」ということを取り上げて、それが「歴史派経済学者の方法論の他の多くの部分と同様に歴史法学派の方法論的論究から機械的に借り来られたものである」という批判を行っている(『経済学の方法に関する研究』P115)。ところで、ホブスンの原子論的人間観に対する批判として次のようなことが挙げられる。まず、ホブスは『産業機構』(*The Industrial System*)における限界生産力説への批判の中で、集団で働くという状況において労働者個々の

生産性を計り、それによって賃金を決定することの問題を指摘している。また、彼は『帝国主義論』の中においても「原子論的人間観」あるいは「個人主義」という考え方に対する批判を行っている。例えば、ボンベイやマドラスという植民地において、「歳入単位として村落共同体の代わりに個々の農民が認められたことが、村落の経済生活に致命的な打撃を与えた」という例を挙げている(『帝国主義論(下)』P221)。これは、「個人的責任を以って唯一の健全な経済的基礎となし、また中央集権的政府を以って最も有効な方式の政治機関であるとなすところの新しい西洋思想を促進するものとして採用された」ものである、とホブズンは述べている(『帝国主義論(下)』P222)。帝国主義を論じる中でホブズンは西洋列強がその価値観を植民地となっている地域に押し付けていく様子も描いているが、このような西洋的な考え方の中に経済上の取引者としての「個人の立場」(『帝国主義論(下)』P194)というものが含まれているということをホブズンは批判しているのである。

5. 新自由主義

十九世紀後半から二十世紀初頭における社会思想においては、マルクス主義が大きな影響力を持っていた。しかし、ホブズンは、マルクス主義に対しても批判を行っている。ホブズンは資本主義の批判者であったが、マルクス主義に対しては批判的であった。マルクス主義は当時ロシアのみならず、ヨーロッパを中心に大きな勢力を持っていた。しかし、ホブズンはマルクス主義に対しては一線を画していた。イギリスでは当時、自由党から労働党へと革新勢力が切り替わっていったが、これらに共通した考え方は、「新自由主義」と呼ばれる社会改良主義であった。これはある意味、イギリスにおける社会主義思想に大きな影響を与えた。現代において、「新自由主義」というとフリードマンやハイエクといった市場に対する政府の介入に批判的な経済学者を指すことが多い。つまり、「新自由主義」という言葉は二十一世紀の初頭に位置する現代においては、主に市場経済に対する政府の役割の削減、公的企業の民営化の促進といった意味合いで使われることが多い。しかし、同じ言葉が時代や地域によって異なる意味を持つことがある。ホブズンは「新自由主義」とは、「旧自由主義」とは異なっていると主張している。ホブズンは民主主義の要素として「自由、平等、友愛」という考え方を挙げるが、「新自由主義」は「自由、平等、友愛のなかでは浮いてみえる「平等」に積極的な意味を与える」点で古い「自由主義」とは異なっているとホブズンは主張している(『告白』P47)。現代のいわゆる「新自由主義」の問題点として、所得格差の拡大などが指摘されているが、これは、いうまでもなく、平等という点を軽視する点において、ホブズンのいう「新自由主義」とは異なる自由主義の姿であるといえる。ホブズンは『告白』において、「新自由主義」あるいは「進歩的自由主義」について、これは、中道的な経済政策であると説明している。つまり改良的な自由主義をホブズンは「新自由主義」あるいは「進歩的自由主義」と考えているのである。

言葉の定義の問題としても一つ、「社会主義」という言葉をここで考えてみたい。この「社会主義」という言葉には、「新自由主義」という言葉同様、二十世紀初頭のイギリスにおいては、現代の「社会主義」という言葉とは、少し異なった意味合いがあったようである。例えば A.マーシャルは『経済騎士道の社会的可能性』(1907)の中で「国民の社会的な改善を促進するために真剣に努力する人々は、時に社会主義者と呼ばれます」と述べ、また、「私自身も、経済学について何も知らない以前からすでに社会主義者でありました」とも述べている(『経済騎士道の社会的可能性(1907)』『マーシャル 経済論文集』P143)。当時の主流派経済学を代表するマーシャルにおいてこのよう

な発言があったことは少し意外な印象を受けるが、おそらく、当時のイギリスの経済学の研究者の間で理解されていた「社会主義」というものが、当時のイギリス以外の国々や現代のそれとは異なっていたからではないだろうか。一方、ホブスンも、当時から「異端」の経済学者と認識されていたという点でマーシャルと対照的な存在である。しかし、「社会主義」に対しても、また、平等主義を志向する「新自由主義」に対しても、当時のイギリスの経済・社会思想においては現代の「新自由主義」とは少し違った考え方が共有されていたことがうかがえるのである。イギリスは当時、自由党から労働党へと革新勢力が切り替わっていったが、これらに共通する考え方は、「新自由主義」と呼ばれる社会改良主義であった。ホブスンも、そして、マーシャルもこの社会改良主義に影響を与えているといえるだろう。

おわりに

ホブスンの活躍した時代、イギリスの革新政党は自由党から労働党へと代わっていった。ホブスンが生きた時代はイギリスにおいても、また、世界においても大きな転換期にあったのであり、経済思想もまた、大きな見直しが迫られていた時代であった。ホブスンはまさに、二十世紀前半における経済思想の「変化」を特徴付ける経済学者であった。

引用文献

- J.A.ホブスン『ヴェブレン』佐々木専三郎 訳、文真堂、1980年
——『帝国主義論』矢内原忠雄 訳、岩波文庫、1952年
——『異端の経済学者の告白：ホブスン自伝』高橋哲雄訳 新評論、1983年
J.A.Hobson, *The Industrial System*, London ;Routledge/Thoemmes Press ,1992
J.M.ケインズ『雇用利子および貨幣の一般理論』J.M.ケインズ著 塩野谷祐一訳 東洋経済新報社、1995.3
レーニン『資本主義の最高の段階としての帝国主義』和田春樹 訳、「世界の名著52レーニン」中央公論社、1966年
M.ブローグ『経済理論の歴史(Ⅲ)』宮崎犀一/ 関 恒義 / 浅野栄一 訳、東洋経済新報社、1985年
C.メンガー『経済学の方法に関する研究』福井孝治 吉田昇三 訳、岩波文庫、1939年
A.マーシャル『経済騎士道の社会的可能性』永沢越郎 訳「マーシャル 経済論文集」、岩波ブックサービスセンター、1991年
清水嘉治「ホブソン「帝国主義」研究の現代的課題——ホブソン生誕百年にあたって——」『経済系第40輯』関東学院大学経済学会、1958年9月
都留重人『現代経済学の群像』岩波現代文庫、2006年